

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 9 日現在

機関番号：34310

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25590212

研究課題名（和文）感情語辞典の作成を目指す基礎的研究

研究課題名（英文）Basic study aiming at the making of the emotional word dictionary

研究代表者

鈴木 直人（Suzuki, Naoto）

同志社大学・心理学部・教授

研究者番号：30094428

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,800,000円

研究成果の概要（和文）：各研究者が使用している感情語は、果たして同じ内容を意味しているのでしょうか。例えば、“happy”は、“幸福”それとも“喜び”、またはその他なのだろうか。また、“fear”は日本と欧米で、あるいは他の国で同じ状況で用いられるのか。内外の研究者は果たして同じ場面に同じ感情語を当てているのでしょうか。

こうした問題意識の下、感情語はどのように使われているのかを調査し、感情語の一本化の道筋を探ることを目的として行ったが、諸般の事情で、英語との対応をとるに至らなかった。

研究成果の概要（英文）：Does the emotional word used by each researcher really mean the same content? For example, is "happy" "happiness" or "joy", or others? In addition, is "fear" used in the same situation in Japan, the West, or in other countries? Will the researchers both domestically and internationally actually apply the same emotional words to the same situation?

I investigated it how the emotional word was used under such critical mind and was intended that I investigated a route of the unification of the language of feelings, but, by circumstances of the diversity, did not come to take the correspondence with English.

研究分野：感情心理学

キーワード：感情語 感情語の使用場面 全国調査 研究者間比較

## 1. 研究開始当初の背景

「感情」は、人間の最も人間らしい部分であり、ギリシア時代から諸科学などに関心を持たれてきたが、実証主義を掲げる自然科学的な研究からは等閑視されてきた。この理由は、例えばホラー映画を見たとき、怖いと言えば怖い、不快であると言えば不快であるというように感情は何よりも主観的な現象であること、同じホラー映画で、必ずしも同じ反応を実験参加者にもたらさない可能性があること、また同じ実験参加者でさえも今の反応と、後日の反応が同じとは限らないという、再現性、客観性の問題を含んでおり、実証科学としての要因になじまなかったこと等があげられる。しかしながら、コンピュータ技術の発展に伴い、動物型やヒト型ロボットに感情を組み込みたいという要求、人工知能(AI)の開発、解析手法の開発、その他コンピュータの廉価化などを通じて、他分野からの感情研究への関心が高まりはじめた。しかも、感情に関する研究は、properである心理学においてさえもあまり研究されずに残されてきた領域であり、諸科学がスポットライトをあてるようになってきた。

しかしながら心理学以外の他分野を含む感情研究が盛んになるに伴い、感情の持つ曖昧さ、多様性が、大きな問題となってきた。かつて20世紀の初めにWilliam Jamesが問うた「感情とは何か」という問いは未だに回答されていない。

報告者は、こうした問題の原因の一つが、感情語の曖昧さにあると考え、本研究を企画した。研究者間で使用されている感情語の概念は果たして共通なのだろうか。異なる場面で同じ感情語が使われている可能性はないのだろうか。申請者はこれまで四半世紀以上、感情を主研究テーマとして研究してきたが、感情研究を進めるにあたって最近とみに感情語の概念の統一の必要性を痛感した。例えば、「happy」は「幸福」それとも「喜び」、

またはその他なのだろうか。ある感情状態を多くの研究者はどのように名付けているのか。皆一緒なのか。また、「fear」を使うときの状況は日本と欧米で同じなのであるか。こうした感情語概念の統一の必要性は、最近欧米においても提唱されつつあり、Izardが2010年に感情語の研究者間の共有性について電子メールで調査を行い、感情語概念の明確化とそれを共有することの必要性を訴えており、本邦でも、沿おうとした動きがみられるようになってきた。

## 2. 研究の目的

近年感情に関する研究が非常に盛んになってきた。申請者はこれまで『感情心理学』を主要研究テーマとしてきた。この中で、研究者間で使用されている感情語は果たして同じ内容を表しているのだろうか、という根本的な疑問を抱くに至った。例えば、「happy」は「幸福」それとも「喜び」、またはその他なのだろうか。多くの研究者はどのように訳すのか。また、「fear」を使うときの状況は日本と欧米で、あるいは他の国、地域でも同じなのであるか。こうした問題意識の下、感情語はどのように翻訳され、英訳されているのかといった研究者間で使用されている「感情語」の共通性を調査する必要性を実感した。そこで、どのような感情語があるのか、またそれはどのような場面で使用されているのかについての調査を通して、ある一つの場面に最も適した感情語を調査する。この研究は同時に外国の研究者たちにも行い、日本語と英語で共通した場面でのどの単語とその単語が一致するのかを同定する。こうした研究に基づき、ゆくゆくは感情語辞典の作成を模索する。

## 3. 研究の方法

研究は、それぞれの感情語がどのような場面でどのような形で使われているかを検討し、その対応集を作ることを主たる目的として行うものである。そこで、まず、一般的にどの

ような感情語が使用されているかを探ることを目的として、全国調査を行った。調査では全国を11に分け、中学生から70歳までなるべく当分に、感情語として思いつくもの、ポジティブな感情語、ネガティブな感情語、中世の感情語、そしてオノマトペを思いつくまま最大20あげさせた。上記調査で得られた感情語について、どのような場面、状況で使用されるかに関する調査を行った。予定では、この調査の結果に基づき、各感情語とその感情語が使用される状況に関する質問紙を作成し、提示した各状況に対して本邦の感情心理学を専門とする研究者は、どのような感情語を当てるかを調査する。次に使用場面を翻訳し、ISRE (International Society of Research on Emotion) の会員にネット調査を行い、ISRE の研究者は同じ場面にどのような感情語を充てるかを調査する。本邦の研究者の結果とISREの会員の結果を比較することで、同じ場面において、どの日本語とどの英語が対応するかを同定する。この手続きを行うことで日本語と英語の感情語が同義になるものと期待される。

#### 4. 研究成果

平成 25 年度に行った感情を表していると思われる語(感情語)を思いつくまま、最大 20 個まで応えるように教示した全国調査の結果、17 歳から 60 歳の 937 人から、感情語全般(2,255 語)、ポジティブ感情語(1,131 語)、ネガティブ感情語(1,041 語)、中性感情語(23 語)、オノマトペ(422 語)が得られた。これらの感情を表すとされた語を 20 人の心理学を学ぶ大学院生に感情語と考えられるかどうかの評価を求めた。その結果、3 回以上出現し、83%以上が感情語としたものを選択し、同義語と思われるものをまとめ 46 の感情語を選出した。しかしながら、嫌悪、嬉しい、恨みの 3 語は 9%の評価者が感情として取り上げていたため、感情語とし

て入れることとし、計 49 語を感情語とし手選択した。その結果、ポジティブな感情語が 11 語(22.4%)、ネガティブな感情語が 35 語(71.4%)、その他 3 語(6.1%)であり、従来主張されてきたネガティブとポジティブな感情語の割合を指示するものとなった。この感情語の割合はこの結果が信頼できるものであることが伺われる。感情語がどれくらいあるかの定説はないが、1970 年代の研究では 550 語があげられている。最もこの研究には、喜怒哀楽という言葉や、品詞の違いが区別されていないため、もう少し少ないと思われるが、実際に一般人が感情語と思っている言葉は非常に少ない可能性があることが明らかになった。次にこれらの感情語がどのような状況で使われるかという調査を行った。この調査をするにあたって、上述した 49 の単語に 23 の単語を加え、68 感情語を設定した。加えた感情語は、先の調査で 80%以上の評価者によって感情語と評価されてはいるが、出現回数が 2 回以下であった単語である。内訳はポジティブ感情語 6、ネガティブ感情語 12、中性感情語 1 であった。調査は、68 の感情語を 17 語ずつの 4 郡に分け、地域を 6 地区、年齢を 40 歳以上、以下の 2 つに分けて行われた。その結果、延べ 861 人からの 14,688 の回答が得られた。得られたデータについて、現在 KJ 法によって分類作業を行っている。まだ結果を報告する段階に至っていないが、同じ様に分類され、一つの感情とされてきた感情が、感情語から見ると 2 つ以上存在し、使用される状況なども異なることが示されている。このことは、怒りには hot anger と cold anger が存在することが明らかになっているのと同様、そしてごく最近、報告者らが悲しみで報告したように、多くの感情には 2 つ以上のサブタイプが存在するのではないかという報告者の考えが支持されるものと思われる。これらの各感情語の使用場面の分析が終わり次第、各感情語の使用場面

を提示し、内外の感情研究者にその場面に適切な感情語を応えてもらい、両者の対応関係を見ることで、国の内外における感情語の統一を目指すことを考えている。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 15 件)

Shirai, M., & Suzuki, N. Is sadness only one emotion? Psychological and physiological responses to sadness induced by two different situations: "loss of someone" and "failure to achieve a goal". *Frontiers in Psychology*, 8, 2017 DOI: 10.3389/fpsyg.2017.00288 (査読あり)

木村友昭・佐久間哲也・伊坂裕子・鈴木直人・牧美輝・烏帽子田彰・内田誠也・山岡淳 大学生及び社会人における抑うつ症状とスピリチュアルな態度との関連 一般財団法人 MOA 健康科学センター研究報告集 20、2017、3-14。(査読なし)

中川紗江・鈴木直人 飲食店における接客サービス従事者の個人特性要因と感情労働の関連 怒り表出性及び対人恐怖心性に着目して 同志社心理、63、2016、20-39。(査読なし)

山口大輔・鈴木直人 競争における 2 者間の優劣関係が血行力学的反応および心理的反応にもたらす影響 行動科学、55、2016、25-35。(査読あり)

Zhu, Y. & Suzuki, N. Your face is even more surprised than you are: Evidence from facial electromyographic activity exposing the genuine surprise. *North American Journal of Psychology*, 18, 2016, 45-58。(査読あり)

Takehara, T., Ochiai, F., & Suzuki, N. A small-world network model of facial emotion recognition. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 2016, 69, 1508-1529. DOI:10.1080/17470218.2015.1086393 (査読あり)

中川紗江・鈴木直人 感情労働シミュレーション場面における心臓血管系反応の変化と持続性 —ペアのロールプレイを用いて— 行動科学、54、2016、71-81。(査読あり)

白井真理子・鈴木直人 6 種類の悲しみ喚起場面における悲しみの特徴および時間的変化 感情心理学研究、23、2015、59-67。(査読あり)

Takehara, T., Ochiai, F., & Suzuki, N. Scaling laws in emotion associated

words and corresponding networks topology, *Cognitive Processing*, 2015, 16, 151-163. DOI/ 10.1007/s10339-0643-z (査読あり)

石山裕菜・鈴木直人 自己不一致と健康、感情の関係性 同志社心理、61、2014、47-54。(査読なし)

山口大輔・鈴木直人 競争時の優劣関係が“焦り”と心臓血管系反応に与える影響 同志社心理、61、2014、38-46。(査読なし)

中川紗枝・鈴木直人 主観的な感情と要求される表情表出の違いが生理反応に及ぼす影響 生理心理学と精神生理学、31、2014、181-191。(査読あり)

Takehara, T. Ochiai, F., Watanabe, H., & Suzuki, N. The relationship between fractal dimension and other-race and inversion effects in recognising facial emotions. *Cognition and Emotion*, 27, 2013, 577-588。(査読あり)

白井真理子・鈴木直人 悲しみ場面の分類と構造 感情心理学研究、20、2013、1-8。(査読あり)

Sato, W., Fujimura, T., Kochiyama, T., & Suzuki, N. Relationships among facial mimicry, emotional experience, and emotion recognition. *PLoS ONE*, 8, 2013, e57889。(査読あり)

[学会発表](計 32 件)

Zhu, Y. & Suzuki, N. Your face is more aware of how you feel: Event-related potential correlates of facial electromyographic activities. International Congress of Psychology 2016/ The 80<sup>th</sup> Annual Convention of the Japanese Psychological Association. Pacifico Yokohama (Kanagawa, Yokohama), July 28, 2016.

Okamoto, M., Nagoshi, Y., & Suzuki, N. Gender differences in coping self-efficacy of the elderly. International Congress of Psychology 2016/ The 80<sup>th</sup> Annual Convention of the Japanese Psychological Association. Pacifico Yokohama (Kanagawa, Yokohama), July 27, 2016.

Ishiyama, Y. & Suzuki, N. The effect of expressive writing about past events on health, mood, working memory and discrepancy between real-selves and possible selves. Society for personality and social psychology's the 17<sup>th</sup> Annual Convention, 272, San Diego (USA), January 28, 2016.

高橋憲司・鈴木直人 棒の二等分課題における大きさ知覚の左右差の検討 日本心理学会第 79 回大会、名古屋国際会

議場 (愛知,名古屋), 2015.09.24.  
鈴木直人 認定心理士の現状 日本心理学会企画シンポジウム 指定討論, 日本心理学会第 79 回大会名古屋国際会議場 (愛知,名古屋), 2015.09.24.  
竹原卓真・落合生史・鈴木直人 表情認知の Small-World-ネットワークモデル 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場 (愛知,名古屋), 2015.09.23.  
原田明典・鈴木直人・越智啓太 目撃後の類似性判断がラインナップ識別に及ぼす影響 日本心理学会第 79 回大会, 名古屋国際会議場 (愛知,名古屋), 2015.09.23.  
Park, E. & Suzuki, N. The structure of emotional concepts in semantic space viewed from central concepts and peripheral concepts. Bi-Annual Conference of the International Society for Research on Emotion (2015), the University of Geneva (Swiss), July 9, 2015.  
Shirai, M. & Suzuki, N. Is sadness only one emotion? Bi-Annual Conference of the International Society for Research on Emotion (2015), The University of Geneva (Swiss), July 8, 2015.  
Takehara, T., Ochiai, F., & Suzuki, N. A small-world network model of facial emotion recognition. Bi-Annual Conference of the International Society for Research on Emotion (2015), the University of Geneva (Swiss), July 10, 2015.  
Yamaguchi, D. & Suzuki, N. How emotion experience affects cardiovascular responses to competitive stress? Bi-Annual Conference of the International Society for Research on Emotion (2015), the University of Geneva (Swiss), July 10, 2015.  
木村年晶・鈴木直人 感情価と覚醒度に基づく刺激語の作成 第 23 回日本感情心理学会大会, 新渡戸文化短期大学 (東京, 中野区), 2015.06.13.  
竹原卓真・鈴木直人 感情連想語における Zipf の法則 第 23 回日本感情心理学会大会, 新渡戸文化短期大学 (東京都, 中野区), 2015.06.13.  
Zhu, Y. & Suzuki, N. The telltale sign of disguises: Evidence from facial electromyographic activity exposing the genuine surprise. Association for Psychological Science 27<sup>th</sup> Annual Convention, Session VI, No.10, New York., (U.S.A.), May 22, 2015.  
Ishiyama, Y. & Suzuki, N. The effects

- of expressive writing on test performance, stress, and interpersonal relationships in elementary school students. The Fourteenth Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. G44, New Orleans (USA), January 19, 2015.  
Tezuka, Y., Murayama, N., Morioka, Y., & Suzuki, N. The influence of answer to the self-report scale on cardiovascular recovery, 17<sup>th</sup> World Congress of Psychophysiology, Hiroshima (Hiroshima), Sept 27, 2014.  
白井真理子・鈴木直人 6 種類の悲しみ喚起場面における悲しみの特徴とその時系列変化 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学 (京都府, 京都市), 2014.09.12.  
山口大輔・鈴木直人 勝敗が競争時の心臓血管系反応に与える影響 日本心理学会第 78 回大会, 同志社大学 (京都府, 京都市), 2014.09.11.  
白井真理子・鈴木直人 悲しみ評価尺度の作成および 6 種類の悲しみ喚起場面における評価の検討 日本感情心理学会第 22 回大会, 宇都宮大学 (栃木, 宇都宮), 2014.05.31.  
中川紗江・鈴木直人 対人場面における聞き手の態度が話し手の生理反応に及ぼす影響 日本感情心理学会第 22 回大会, 宇都宮大学 (栃木, 宇都宮), 2014.05.31.  
21 小林孝寛・鈴木直人 記憶情報の感情価が隠匿情報検査時の呼吸反応に及ぼす影響 日本生理心理学会第 32 回大会, 筑波大学 (千葉, つくば), 2014.05.17.  
22 Ishiyama, Y. & Suzuki, N. The Effect of Expressive Writing on Health, Mood, Working Memory, and the Discrepancy between Real- and Possible-Selves. The Sixteenth Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. Long Beach(USA), Feb 28, 2014.  
23 Park, U, & Suzuki, N. The semantic structure of emotional concepts in Japanese, The Sixteenth Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. Long Beach (USA), Feb 27, 2014.  
24 中川紗江・鈴木直人 感情労働のシミュレーションが生理反応に及ぼす影響 - ロールプレイ技法を用いて - 第 77 回日本心理学会大会, 北海道医療大学 (北海道, 札幌), 2013.09.21.  
25 石山裕菜・鈴木直人 理想自己と現実自己のズレと健康・ワーキングメモリの関係性 - 筆記療法メカニズム解明のための基礎的研究 - 日本心理学会第 77 回

- 大会, 北海道医療大学(北海道、札幌), 2013.09.20.
- 26 朱 映 菡・鈴木直人 PREMIER EXPRESSIONS の検証 日本心理学会 第 77 回大会, 北海道医療大学(北海道、札幌),2013.09.19.
- 27 白井真理子・鈴木直人 4 種類の悲しみ喚起場面における主観反応の時系列変化 日本心理学会 第 77 回大会, 北海道医療大学(北海道、札幌),2013.09.19.
- 28 朴 恩珠・鈴木直人 プロトタイプとしての感情概念の再帰的自由連想. 日本心理学会 77 回大会, 北海道医療大学(北海道、札幌),2013.09.19.
- 29 Nakagawa, S. & Suzuki, N. The effect of emotional dissonance of emotional labor role-playing on physiological responses. 18<sup>th</sup> International Society for Research on Emotion, the University of California (USA, Berkeley), Poster presentation, Aug. 5, 2013.
- 30 Shirai, M. & Suzuki, N. Time-series changes of subjective emotional rating in four specific situations eliciting sadness. 18<sup>th</sup> International Society for Research on Emotion, the University of California (USA, Berkeley), August 3, 2013.
- 31 Park, E.J., Suzuki, N., Yoo, J.Y & Lee, J.H. Structure of affect viewed from central concepts and peripheral concepts in Korean speaking culture. 18<sup>th</sup> International Society for Research on Emotion (ISRE) 2013, University of California (USA, Berkeley), August 3,2013.
- 32 Ishiyama, Y. & Suzuki, N. Relationships among health, mood and discrepancy between real-self and possible-self; for establishing mechanism of expressive writing, The Fifteenth Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology. B264, New Orleans(USA). 2013.02.14.

〔図書〕(計 1 件)

岡市広成・鈴木直人(監修) 心理学概論  
ナカニシヤ出版 2014. 441 頁(1-441 頁)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：

出願年月日：  
国内外の別：

○取得状況(計 0 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等  
なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

鈴木直人(SUZUKI, Naoto)  
同志社大学・心理学部・教授  
研究者番号：30094428

(2)研究分担者

( )

研究者番号：

(3)連携研究者

( )

研究者番号：

(4)研究協力者

( )